

『古事談』第五 賀茂社話群考

生 井 真理子

一

石清水八幡宮の『宮寺縁事抄』第二十八には、日記類に基づいて作成したかと思われる、賀茂別雷神社の初めての焼亡に関する抄出記事がある。長治三年（一一〇六）四月十二日の焼亡の記事の他、宝殿新造の問題や廢朝、奉幣使、失火の罪を問われた者の配流など、その後の対応が抜き出されている。しかし、それだけでは終わらず、「九月二十七日以後、有山大衆騒動沙汰」「同二年二月中旬以後、天下不静云々」「同七月十九日、天下大事（堀河天皇崩御を指す）」「同十二月一日、王有御即位事」ということまで抄出する。続いて元永二年（一一一九）十一月一日の鴨御祖社焼亡の場合も、新たに造られた宝殿への遷宮で一件落着した後、翌年の輔仁親王の薨去・主上を含めた咳病の流行・四月の改元・延暦寺と三井寺大衆の闘争

まで書き出されている。この姿勢は、治承二年（一一七八）正月七日、彗星出現の後で翌年までに起こった異変の前例を、『山槐記』に古代から次々と書き出した藤原忠親と同様の発想で、賀茂上下社焼亡という事態を捉えようとする意図を意味するだろう^①。すなわち、国家の尊崇の篤い神社の焼亡も国家的規模の異変の兆とみなし、「事後の実例」で確認しようとしたものと思われる。

『古事談』第五神社仏寺の巻頭、伊勢内宮の初めての焼亡を記した第一話（以下5―11のように表示）も、延暦十年（七九二）八月五日の火事の顛末とその後の朝廷の対応を記した後、一段下げて「今年七月以後至同十四年。有征夷事。大將軍乙麿。田村麿等也」「十二月有遷都。同十二年遷平安宮」と記す。「征夷事」は七月から始まっているので、「事後」とは言えないが、大兵乱と遷都という国家規模の政変に言及するわけで、これは、『宮寺縁事抄』の賀茂

社焼亡の記事と類似の構成をなしていると言える。伊勢内宮の異変に国家の大異変との連動を見るのである。次の5―2は、長久元年（二〇四〇）、大風大雨により「伊勢大神宮正殿、及東西宝殿、神宮瑞垣、御門等皆悉顛倒」という事態に、伊勢への公卿勅使が選ばれ、下向しようとする矢先、「神宮御託宣」が齋宮から示され、結局公卿勅使は停止、ただ辰筆の宣命を捧げ、天皇自ら宮中の庭で伊勢に向かつて「毎夜御拝」ということになったという記録文の抄出である。これは、伊勢大神宮外宮の被災の初例でもある。ここでは、託宣の内容が記されず、神が公卿勅使を停止させた理由が明確ではない。が、少なくとも、天皇家の皇女が齋宮となつて奉仕し、齋宮を通じて神の意志が伝えられ、天皇自ら陳謝のための御拝がなされるなど、伊勢大神宮が天皇と直結する至高の神社であることは、強く印象づけられる。（『春記』によれば、齋宮から提示された託宣の内容は、神居復旧の後、公卿勅使を派遣すべきだというものだった。）すなわち、『古事談』第五では、伊勢は国家と天皇のための神社として位置づけられる。続く第三話から第十二話までは石清水を中心とし、宇佐・宮崎・藤井寺新宮までを含めた八幡宮である。俗人では天皇・院・親王・大臣以下公卿クラスが登場し、若宮信仰では医師丹波重基・石清水別当、仏教界では弘法大師や藤井寺の尼といった登場人物の幅広さが見られ、天皇家や王孫源氏の祖神・出家し

た菩薩神という八幡神の側面が話題の中に網羅されている。『古事談』第五の神社の配列は、二十二社の神格の高い順から並んでいることがすでに指摘されているが、二十二社で第三ランクの神社が賀茂社であった。では、賀茂社は『古事談』第五の中では、どのような神社として位置づけられているのだろうか。

二一

『古事談』神社の部の構成は、話題の選択と言ひ、配置と言ひ、一見淡々と進むが、実に綿密に計算されている。伊勢が内宮と外宮の話題で対称をなすように、八幡宮話群も対称的な構成になっている^④。賀茂社話群四話も、前半二話の話題の場は賀茂別雷社（以下、上社）、後半二話は賀茂御祖社（以下、下社）である。最初話と最終話には、上社の氏人の筆頭の神主、下社の氏人の筆頭の禰宜が登場。第二話と第三話には利生を願いながら対称的な結果の二人。賀茂は全部通夜の夢の話題だが、5―13と5―14は夢に直接神が現れる。5―14と5―15は本地の話題で共通し、5―15と5―16は神幸で共通する、というように共通項がずれながら、連続する仕組みになっている。四話の構成だけではない。伊勢・八幡・賀茂と話題を比較すると、伊勢と八幡の最初話はそれぞれ焼亡、及び御正体と神像で共通し、無事だった御正体（神鏡）と焼失した僧形八幡像が対

称的である。八幡と賀茂の最初話とともに御供の話題で共通し、八幡は精進の御供で賀茂は魚鳥の御供と対称的、という具合に、同じ共通項がずれてゆく。こういった共通項があるということは、話の連携という編集技術に加え、読者にとって一見して比較が可能だということでもある。比較することで、その神社・神の特性もまた自然に浮き上がってくるのである。

もつとも、それは必ずしも常識的な特徴とも限らず、意外性を秘めるからこそ話になるという面はあるだろう。たとえば、5-13。

勢田尼上が、「モロモロノ魚鳥」の御料を供える時刻に行き合わせ、氏人に「大明神は何がお好きか」と尋ねるが、氏はわからず、その日の通夜の夢に、宝殿の戸が開き、「我弥陀念仏ヲ好也。常可申也」と大明神が告げたと見る。そこで賀茂社において僧侶を頼み、「七ヶ日不断念仏」を行うと、結願の夜には、「御社乃跡池ニナリテ、蓮花開敷」き、神主成重が「これは念仏人が往生すべき蓮花也」と告げると夢に見たという。賀茂社の御供は、応徳三年（一〇八六）託宣により神社主催で始まり、堀河天皇の寛治四年（一〇九〇）、賀茂社の申請によって、公事として「日供」が始められ、朝廷から御供料に六百余町の不輸祖田が寄進された⁵。5-13では、醍醐天皇の同母弟敦実親王が御供のための荘園を寄進したというから、伊勢はもちろん石清水に比べても歴史はまだ浅い。しかも、神は直々に

尼の夢に顕れ、「我弥陀念仏ヲ好也」と告げるのだから、その意外性に話のポイントがある。

ここで「御社乃跡」が蓮花が咲く池になったとは、極楽浄土を想起させ、次の5-14で賀茂の本地が正観音であると、範兼が夢に見て、東山の地に堂を建立することに繋がってゆく。ただし、範兼が書写した般若心経を奉納することにより、大明神は龍蛇が受ける三熱苦を免れたと示現して、雷神としての苦惱を漂わせてもいる。5-19の、石清水八幡宮に源有仁が七日間参詣して往生を祈り、往生を遂げたという話と比較して、大菩薩としての神力を持つ神と、仏教的な救済が必要で法施を望む神との力量の差が明瞭になっている。また、範兼の三つの願いのうち一つは叶えられず、実重に対しては「また実重が来た」と賀茂神が嘆いたといい、神の力の限界が明示され、八幡の救済力との差も目を引く。

その八幡大菩薩が下社に現れるのが、5-16である。保延六年（一一四〇）正月、通夜の当番に当たっていた禰宜季継は夢に、八幡宮からといって獅子頭や鉾など神宝等を舞殿に運び込むと見た。不審に思っで尋ねると八幡宮が焼失したので大菩薩がこちらへ渡御するのだという。翌朝、都から参詣の人に昨夜八幡宮が焼失したという情報を得る。石清水八幡宮焼亡は、その当時大きな話題となっただけでなく、八幡神は源為義が創建した左女牛若宮八幡宮に遷ったと

いう夢想が噂となつて、「都人士女」が左女牛へこぞつて参詣したというから、季継の夢が途方もないわけではなかつた。しかし、上社焼亡の時には、正殿の御正体は末社の貴船社へ移され、石清水内殿の御体も護国寺へ遷されたように、必ず関連する所へ運ばれた。神社に所屬する者の感覚にすれば、実に「不思議の夢」である。

保延六年の石清水焼亡については5—3ですすでに話題になつているだけに、この話も八幡宮話群の中にあつてもよいようにも見える。だが、『古事談』編者はあくまでも下社の話題として位置づけた。前話5—15は、実重が下社で本地の示現を望んで、夢に半木社の辺で上社から百官の供奉を従えた行幸に出会い、鳳輦には、その外題に『法華経』方便品の「一称南無仏、皆已成仏道」の偈句を記す金泥の経一卷が立つと見たという。これを本地は法華経とするか、この偈を説いた釈迦と見るか、この場合の「仏」は諸仏を指すので特定しなかつたか、解釈は分かれよう。ただ、「行幸」という形の神幸は、5—6に、

放生会被准行幸之儀式事ハ、延久二年始也。上卿大納言隆国云々。(以下略)

とあるように、現実世界では、延久二年(一〇七〇)に始められた石清水放生会の神幸の時だけである。賀茂上社から神の行幸があつて半木の道を通つて下社にたどり着くと、次話の八幡神の行幸にす

り替わるような配置に、編者の無言の意図を見ることができよう。

賀茂上社の神仏習合については、嵯峨井建氏の論考に詳しいが、寛弘二年(一〇〇五)には下社に神宮寺の存在が確認され、寛仁四年(一〇二〇)道長は上・下社で神前読経を行い、康平三年(一〇六〇)関白頼通は大般若経を奉納、白河院は嘉承元年(一一〇七)には尊勝陀羅尼供養を、天仁二年(一一〇九)には八社のうち賀茂には法華経の金字御経供養を行わせ、永久四年(一一一六)には賀茂上社に鳥羽天皇御願としての塔が、保安元年(一一二〇)より賀茂下社に中宮(待賢門院)のために東西の塔の建立された。寛治六年(一一〇九二)には初めて上社に供僧が置かれ、参議藤原為隆は賀茂社に経藏を建て、大般若経と四天王像を奉納した等々、貴神の崇敬篤く、賀茂両社境内の仏教的な設備も整つていく。承安四年(一一七四)の頃、藤原経房は夢想により賀茂社に毎月参詣、奉幣の後、賀茂社の供僧を導師として、「後世の資」のために般若心経六巻を供養している。『古事談』5—14の範兼が行つた心経の供養の方法も、やはり同様だったかと想像される。また、5—14・15では観音・法華経と賀茂神が結びついているが、長久四年(一一〇三)頃に書かれた『法華験記』中・70「蓮秀法師」の冥途蘇生話には、すでに賀茂明神と法華経・観音信仰との繋がりが見られる。

なお、5—13の成重は神に仕える身だが、『朝野群載』卷二所引

の『賀茂社桜会縁起』によれば、彼の祖父成助は天喜二年（一〇五四）の頃から法華八講を始め、彼の死後も息子成継によって続けられた。永保元年（一〇八三）、これを聞き及んだ后宮・公主・卿大夫等が、各一品を書写供養の齋会、法華三十講を行ったという。成継の子成久や、成継の弟で成重の父でもある重助は出家入道しており、また、成重の死後になるが、成重の弟重継は氏寺としての最長寿寺を建立というように、当時の上社の神主一族も仏教に傾倒してゆくことになる。また、『轉法輪鈔』からは、成継女（藤原雅教室）や神主重忠が法華経供養を、下社では彌宜裕季らが大般若経の供養の法会を催していたことが知られる。⑨ そういう視点から見れば、仏教的色彩の目立つ『古事談』の話題も当時の社頭の雰囲気伝えていくことになる。

しかしながら、『古事談』を含めて、賀茂明神に後世の救済を祈る「話」はほとんどなく、『古事談』より約半世紀遅く成立した『古今著聞集』（以下『著聞集』）には賀茂社の個人祈願の話を十話採録するが、時代的には『古事談』に登場する人物群とほぼ重なるにもかかわらず、仏教色はほとんど見られない。ことに、『神祇』の巻では官位昇進祈願が中心であり、これは他の文献資料を見ても多くの裏付けが得られる。たとえば、非参議藤原高遠は、寛弘元年（一〇〇四）十二月七日に七日詣での最後の日、通夜の夢で念願の

太宰大弐の拜任を予告された時の歌が家集にあり、『拾遺集』や『袋草紙』にも採られている。藤原顕輔は「身のうれへ待る比、賀茂社にまうでて」、

わがたのむかものはなみたちかへりうれしきせぜにあふよしもがな（『顕輔集』）

を詠み、藤原俊成も若かった頃は「百度詣などしける」と振り返った。⑩ 官位を所望して成否を決する日に賀茂社に参籠した例では、長寛三年（一一六五）神祇伯を望んだ顕広王や、治承四年（一一八〇）五位藏人を願った藤原光長（高藤流、光房の子）などが知られ、ともに望みが叶っている。⑪ 実際には法施も行われたかも知れないが、数多く参詣する百度詣や千度詣、正殿の他末社も含めて順に参拝してゆく宮廻り、参籠といった点が話題に上るところを見ると、こちらの方が一般的なイメージであり、むしろ賀茂社の仏教的側面に目を向けた点に、『古事談』編者の関心のありようの特徴が見られると言えよう。

三

ところで、『著聞集』第二「神祇」と『古事談』第五の神社仏寺の賀茂社話群では共通点がある。登場する人物たちの階層である。

『古事談』の賀茂社の話題で、まず、目につくのは、

5-13 「勢田尼上〔神祇伯頭重母〕常參詣賀茂社之人也」

5-14 「範兼卿奉仕賀茂社之人也」

5-15 「式部大夫実重ハ、參詣無双之者也。」

5-16 「鴨社欄宜季繼、保延六年正月二十三日、依当番通夜

御社之間」

と、人物と通夜での夢に重点をおいて決まった形で始まることだろう。そこで、登場人物の系譜を簡単に考察しておきたい。

5-13の勢田尼上とは、「神祇伯頭重母」という割注から見ても、村上源氏の大納言源雅俊の妻であった高階為家女である。高階為家は白河院の近臣として、諸国の受領を歴任した著名な人物。割注がなければ、誰とわかるのは身内の者だけと思われる「勢多尼上」という呼称からして、この話がもともとは身内の中で語られたものだったことを思わせる。勢多尼上の夫、大納言源雅俊（村上源氏）は、故堀河天皇の追善のために京極に九体阿弥陀堂を建立、ここには白河院の御幸もあった。保安三年（一一二二）に念仏を称えながら没したと、承久二年（一一二〇）成立の『三外往生伝』に往生人として、その行跡が記される。尼上が夢を見たのは、成重が上社の神主の時だとすれば、保延二年（一一三六）から久安元年（一一四五）の間であるから、すでに雅俊は故人であった。遺族にとっては、賀茂神の示現は心強く、賀茂社にとっては、神主一族の仏教傾倒を反

映し、賀茂明神の利生に、後生の救済という時代の要求を吸い上げようとした早い例となるだろう。なお、成重の姉妹には白河院に寵愛された宇礼志幾、伊波比乎（賀茂女御）がおり、祖父成助は歌人としても著名であった。

勢多尼上の息源頭重は、堀河天皇の死によって村上源氏の勢威が衰えたことも因としてあったのか、二十年以上の間、少将・備前介に留まっており、その後は無官であったようで、ようやく保延四年（一一三八）に叔父である神祇伯源頭仲が薨じて後、神祇伯に就任して、長寛三年（一一六五）に頭広王が神祇伯に任ぜられる前に没したかと思われる。神祇伯源頭仲の娘たち堀河・大夫典侍・兵衛は待賢門院に仕えている。また、角田文衛氏は待賢門院の乳母但馬を高階為家女と推定し、為家の子孫が待賢門院に仕えるなど、高階氏との繋がり指摘した¹²⁾。崇徳天皇の即位で待賢門院が国母となった保延年間に頭重の官途に道がやと開けたのは、待賢門院筋の人脉も考えられる。一方、次の5-14の藤原範兼の母は高階為賢女であり、為賢は高階為家の四男であるので、範兼の母と頭重とは従兄弟関係になる。範兼は武智麻呂の孫、貞嗣の流れに属する藤原氏の式部少輔能兼（従四位下）の子である。文章博士となった実範以来、四位・五位層の儒者の家柄で、二条天皇の東宮学士・侍読を勤め、刑部卿従三位に至った。歌人・歌学者でもあった範兼の生涯を追っ

た加島吉春氏は、範兼の順調な昇進の背景には高階氏との血縁関係があることに注目しているが、天養二年（一一四五）以後久寿二年（一一五五）まで官位昇進が滞ったのは、藤原頼長が氏長者となったことに起因するのではないかとする。天養二年〓久安元年は待賢門院が崩じた年でもある。範兼の人脈には高階氏経由の待賢門院との繋がりも無視できないものがある。

後白河天皇が即位すると、その乳父藤原通憲と高階重仲女の間にも生まれた俊憲と、範兼とが東宮学士に選ばれるが、神祇伯源頼重もまた、後白河院がまだ親王として保延五年（一一三九）に十三歳で元服し、久寿二年（一一五五）に践祚する間に儲けた「若宮」を養育していた¹³。勢多尼上の夫大納言雅俊の弟である国信の二人の娘たちはともに、関白忠通の妻となり、基実と基房を生んだが、忠通は藤原実能（徳大寺の左大臣）の娘育子を猶子とし、二条天皇の後宮に送り込んだ。育子の母は、勢多尼上のもう一人の子頭俊の娘である。藤原実能の弟である季成（権大納言）の女は、後白河院の親王時代に守覚法親王や以仁王を生む。『山槐記』治承三年四月十六日条には、

仁和寺若宮出家了、宮供御膳、陪膳実任、役寛晴（故神祇伯源重朝臣子）

とある。この「仁和寺若宮」は道法法親王を指し、仁和寺喜多院の

守覚法親王のもとに入室した。出家の儀式の際、陪膳を勤めた「実任」とは、藤原頼長の妻幸子の葬礼の折素服を着した僧実任と同一物かと思われる¹⁴。幸子は藤原実能女であること、守覚法親王の母が藤原季成女であることから、この実任は「尊卑分脈」に言う「公能（実能男）の子」であろうか。とすると、頼重の子寛晴も仁和寺の守覚法親王のもとにいたと思われ、頼重が育てた若宮とは守覚法親王で、「乳母子」として近侍していた可能性もくはない。

こうしてみると、頼重も範兼も「保元の乱の勝ち組」に属していることになる。範兼は父祖を超えた昇進をするが、範兼と同日に従三位に叙されたのが平重盛で、重盛の母（高階基章女）もまた高階氏であった。平家全盛期、範兼の娘範子と兼子は、高倉天皇の第四皇子（後鳥羽天皇）の乳母となり、平家の都落ちの後、範子は源通親と再婚した。通親は範子の娘在子を養女として、後鳥羽院の女房となし、在子は第一皇子（土御門天皇）を生んで承明門院となった。範兼の弟で養子でもあった範季の娘重子は、後鳥羽天皇の寵愛を受け、順徳天皇を産む。こういったことから、範兼の子孫は、後鳥羽天皇践祚を機に栄えるのであり、『古事談』成立の時期には、まさに5―14の話が「子孫繁昌、ヒトヘニ大明神之利生也」と締めくくりにふさわしい状況であった。

ついでながら、『古事談』編者源頼兼は以上述べてきた人々に、

血縁的に意外に近い位置にいる。勢多尼上の夫である雅俊の異母弟に雅兼がおり、その子雅綱の妻と勢多尼上の子顕俊の妻はともに藤原惟信女で姉妹であった。雅綱の妻は忠通の乳母であり、かつ編者顕兼の父宗雅の母である。さらに、顕兼の妻は後白河院の近臣として知られる高階泰経の女で、泰経の子経仲は範季の女と結婚していた。範季の母範子は村上源氏嫡流の通親と再婚しているから、政權の中枢部に近い人物群と顕兼は姻戚関係で繋がる所にいたのである。続く5-15の式部大夫実重は、熱心な賀茂参詣者ということから見て、『千載集』に

藏人にならぬ事をなげきてとしごろ賀茂社にまうで侍けるを、
二千三百度にもあまり侍ける時、貴布欄の社にまうでてはしら
にかきつけ侍ける
いままでになどしづむらんきふね川かばかりはやしき神をた
のむに

かくてのちほどなく藏人になり侍にける、近衛院の御ときなり
とある平実重と見てよい。出身は桓武平氏、高棟王流で時望の子孫である。日本歌学大系の『和歌色葉』「名譽歌仙者」には、

「詞花・統詞・千載」式部大輔入道願西 俗名実重 宮内大輔
平輔昌息

とある。ここに記された実重の官職は式部省の次官「式部大輔」で、

『古事談』に言う無官の五位の「式部大夫」の違いは大きい。『古事談』も写本によっては「式部大輔実重」と記すものもある¹⁷⁾。だが、『和歌色葉』の写本にも「式部大夫入道願西」の表記を持つものがあるのである¹⁸⁾。

結論から先に言えば、「式部大夫」が正しい。『尊卑分脈』や日記類を見ると、同時代には、儒者で大内記・式部少輔・越中権守になつたという藤原実重や、藤原顕実の子実重（従五下、阿波権守）がいて、彼の経歴を見るのに厄介だが、『本朝世紀』によれば、彼は康治元年（一一四二）には中務少丞正六位上だつたよう¹⁹⁾で、「高陽院藏人一臆」として、藤原忠実の娘泰子にも仕えた。『雅兼集』から、まだ殿上の藏人になる以前、源顕兼の曾祖父雅兼と歌のやり取りがあつたことが知られる。久安五年（一一四九）六月に近衛天皇の六位藏人に任ぜられた。同六年十二月二十日「秋除目」には、

中務丞正六位上橘朝臣資定（禎子内親王当年給、下名加 平実
重任式部替）
式部丞正六位上藤原朝臣有盛（元兵部丞、平実重叙位替）

（傍線筆者）

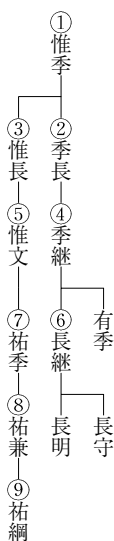
とあつて、この年に平実重は中務丞から式部丞となり、続いて叙位で従五位下に昇格して藏人を去り、式部丞の職を解かれて散位となつたかと思われる。式部大夫の呼称は、これに基づくだろう。平実

重と同族の平信範の日記『兵範記』には、仁平二年（一一五二）八月七日、藏人左少弁平範家の子の元服の儀式に、「式部大夫実重」が奉仕しているのが見える。この頃、『台記』にも彼の名が見え、高陽院崩御の後は、忠実の子頼長に仕えていた。久寿二年（一一五五）の近衛院崩御に際して御誦経使となっている。『兵範記』では保元三年（一一五八）二月十四日の祇園八講に召集された諸大夫の中に、「実重成房勤堂童子」と実重の名が見える。これが平実重かどうか確実ではないが、これを最後に平実重の名は見えなくなる。その後、出家して西山に隠棲したことが彼の歌から知られる。

5—16の禰宜季継は、『兵範記』仁平二年（一一五二）七月九日の記事には、保延四年（一一三八）に下社の神宮寺等が焼失し、季継が復旧造営に着手したが、完成しないうちに「去々年逝去」、後を受け継いだ禰宜惟文が神宮寺御塔の供養を行ったとあるから、季継は久安六年（一一五〇）頃に没したと思われる。季継が石清水八幡宮焼亡を告げる夢を見て、それを語った相手は宮廻りをしていた美濃権守藤原親重だが、彼は勝命法師としてよく知られた歌人でもあった。浅見和彦氏は、『耀天記』に、日吉社の禰宜成仲の舞が親重で、親重は「賀茂ノ泉ノ禰宜ノ甥」だとする記述があることを指摘している。²⁴ 続群書類従本には、「甥」に「シフト」と振り仮名をつけるが、「甥」とは、『色葉字類抄』等の古辞書によれば「ヲヒ」

すなわち「甥」のことである。

「泉の禰宜」の「泉」は、下社禰宜が住んだ河崎の泉亭のことを指し、庭に泉があつて泉川が流れていた。『泉亭旧図』では、泉亭には「季継ヨリ祐綱マテノ亭」、その南側にある南大路亭には「長継長守住之」という書き込みがある。²⁵ 『長秋記』保延元年（一一三三）四月十八日条の「少将於下御社禰宜季継泉家休息」、『明月記』建仁二年（一一〇二）七月六日条の「御幸禰宜泉」、『百鍊抄』建保四年（一一二六）正月九日条の「御幸鴨禰宜祐綱泉家、御方違也」等の記事から、禰宜季継・祐兼・祐綱がここに住んでいたことが確認できる。下社禰宜の系図を一部図式化し、禰宜になった順番を数字で表すと、



というようになる。²⁶ ④季継の妻は③惟長の女で有季を生み、⑥長継の妻は⑤惟文の二女である。この時期は、一種の両統迭立状態を、婚姻関係で一本化するような方式で禰宜職を受け継いでいたようである。泉亭も季継から祐季の子孫に譲られてゆく。『泉亭旧図』の「季継ヨリ祐綱マテノ亭」という表現からすると、惟文や祐季も泉亭に住んでいた可能性もあるのだが、今のところそれを示唆するも

はない。

さて、『耀天記』の記事によれば、親重の母は下社の禰宜の娘と
いうことになる。上社の神主重保が編集した『月詣集』に、「出家
して修行しありきける時、泉川といふ所にて」

故郷をたれにかとはん泉川都鳥だに見えぬわたりは

という勝命の歌があり、「泉川」という名に故郷への懐かしさを抱
いたことがその傍証となろう。また、「泉の禰宜」は「号」と見な
してよい。『泉亭旧図』の記述からすると、泉亭の創始者は季継と
解せる。傍証となるものはないのだが、そうであれば季継が時期的
にも、「泉の禰宜」と呼ばれるのがもつともふさわしい。その季継
の三男、長継が没した折、『季経集』には「勝命法師哀傷歌どもよ
みたる」とあり、勝命は長継を失った慟哭の思いを歌に託している。
『古事談』5-16にいう石清水八幡宮の焼亡した保延六年（一一四
〇）には、長継は二歳、親重は二十七歳である。勝命法師が長継の
次男、鴨長明に歌の心得を教えている事等々から見ても（『無名
抄』）、親重が季継と血縁的にかなり近いことを思わせる。

以上のことから判断して、勝命＝親重の母は季継の姉妹と推測さ
れ、季継が親重に夢を語ったのは、甥という近しさがあつたからと
見られる。また、親重の一族（二説に甥）、親忠（藤原定家の母方
の祖父）は美福門院の乳父であつたので、保元四年（一一五九）二

月二十一日の姝子内親王（高松院）の立后（二条天皇の中宮）の際、
奉仕している「親重」は彼であろうか。鴨長明は、美福門院の産ん
だ高松院の御給で叙爵しているから、親重も美福門院サイドで何ら
かの関わりが推測される。²⁵八幡宮が焼亡して、「八幡大菩薩が下社
に現れた」年、美福門院は皇子を産み、皇子は翌年即位し、近衛天
皇となつた。

四

さて、賀茂社の話題に名前だけでも登場する者も含めて、人物群
を簡単に見てきた。季継と親重の極位はそれぞれ正四位上と従五位
下で、身分的には一番高いのが範兼の非参議従三位である。しかも、
登場人物は、待賢門院・後白河院や高陽院・近衛院・美福門院とい
つた、鳥羽院に繋がる権力の周辺部におり、時の運によつて浮き沈
みする階級の者たちであつた。この点、官位昇進を願つた『著聞
集』「神祇」の巻の人々と階層は一致し、『古事談』が描き出す賀茂
社頭の様子は、都において中・下流官人の個人祈願が盛んだつた賀
茂社の役割の一面をよく捉えていると言えよう。

ただ、『著聞集』は仁和寺辺に住む女や上社の祝久継（禰宜成久
の子）が、仁安元年（一一六六）に「天下の政不法なるによりて、
賀茂大明神、日本国を捨て他所へわたらせ給べきよし」を夢に見て、

朝廷が占わせると実夢と出たという話を載せ、賀茂神が天下国家に関わる神であることを示すのを忘れなかった。『続古事談』巻一では、賀茂社で皇子誕生を祈願する坊門尼上に、鳥羽天皇の誕生を告げる賀茂明神の夢告があった話を載せている。

賀茂社は平安遷都の際、王城鎮護の神として優遇され、嵯峨天皇の代には葉子の乱後、伊勢と同じように齋王を置き、宇多天皇の代には即位奉養のための臨時祭が始められ、朱雀天皇の代に天慶の乱平定の後、初めての行幸が行われるというように、大きな歴史の変動の度に社格を着実に上げてきた。賀茂祭や撰関賀茂詣のような華やかな話題もあったが、『古事談』編者はそれらに目を向けなかった。無論、範兼没後の子孫繁栄に言及するように、賀茂神と政権との繋がりは意識されていないわけではない。登場人物群の背後に権門の存在を伺うこともできる。だが、天皇と直結する伊勢や、殺生禁断を標榜しつつも「国家の為に害をなす者に対してはこの限りでない」と託宣した八幡（5―8）に比べ、賀茂神に国家守護神としての直截な表現はない。

その理由の一つとして考えられるのは、第三位の神としての位置づけのためである。すなわち、円融天皇以後の神社行幸は必ず石清水・賀茂の順であり、神社焼亡の際、伊勢・宇佐・石清水の時には、天皇陵の例に准じて廃朝五日、賀茂の場合は三日である。賀茂社は

一般の神社とは異なる特別待遇を受けたものの、朝廷は伊勢・八幡よりも一段下げた扱いをしている。『古事談』では賀茂明神に祈願する俗人の階層は、もっぱら公卿以上の八幡大菩薩に比べ、一段低い諸大夫層になる。登場人物も第三ランクなのは、伊勢・八幡に並ばないよう、第三位の神の格付けを意識的に反映させた「話題の選択」だったのではないだろうか。天皇に直結する齋院の話題などを入れると伊勢に並んでしまうのである。

さらに、賀茂神を喜ばせた前半二話の登場人物、勢多の尼上・藤原範兼が待賢門院に繋がり、賀茂神を嘆かせた実重は高陽院に仕え、夢に八幡を迎えた季継が美福門院にどこかで繋がるとすると、鳥羽院後宮の運命が背後に浮かび上がることになる。皇子を産むことなく終わる高陽院と頼長に仕えた実重の人生は、保元の乱で後白河院側に属した顕重や範兼たちとは明暗を分けた。「先生の微運により過分の利生に預からざるか」という実重の運命は、政治の世界にそのまま重なっていた。『古事談』神社話群は、二十二社の格付けと国家組織の縦の系列を、登場人物によって表すと同時に、さりげなく「神々が関与した」歴史を組み込んでいると見てよい。しかも、賀茂神を喜ばせた前半二話の登場人物が編者ゆかりの人々であることも偶然ではあるまい。改めて論ずべき課題ではあるが、『古事談』にはこの手法があちこちに散見するからである。

こうして第三位の神として位置づけられた賀茂社だが、撰関家との関わりは無視されている。5—21で中山社が冷泉院の時から中島に祀られ、ことのほか霊験があったが、後冷泉院の時に託宣で他所へ移ってしまった話があるが、これは撰関家の全盛期にそのまま重なる。続く5—22で、頼長は「官幣に預からない古神祇」を捜し、近衛院を呪詛、近衛院は崩御するも、頼長自身も保元の乱で矢に当たって死去した話を載せるあたり、『古事談』神社話群はあくまでも国家中心で、撰関家の賀茂詣などを華やかに描いて賀茂社の話題を彩ろうとするような志向とは無縁の世界であった。

注

- ① 藤原忠親は彗星は「希代之変、除旧布新之象」であり、「兵衷水旱疾疫謀反飢饉」などの「徴」となるとし、彗星が現れてから起こった数々の異変を日記『山槐記』に書き出した。たとえば、長治三年（一一〇六）正月に坤方に彗星が現れた時は、「同月主上不予、及数月、「四月閏白煩病十余日」、「九月改元嘉承」、「十二月賀茂別雷社焼亡」、「同年七月十九日天皇崩」という具合で、大体翌年のできごとまで目を向けている。
- ② 『春記』長暦四年八月十五日条、後朱雀天皇の言葉「昨從齋宮示送云、去十二日託宣云、只今神居不穩、尤似軽々也、外人參入奉拜、尤可無便、神居復旧之後、可有此事者、今依信此託宣、已停奉幣使了、恐懼還深、抑依此事勞身少心、躬自於庭上遙拜祭文祈申也。」
- ③ 吉原浩人氏「中世説話集における「神」―『古事談』『古今著聞集』の

編構成意識を中心に、「解釈と鑑賞」五二巻9号、一九八七年九月発行。拙稿「『統古事談』と『古事談』―石清水八幡宮余話―」、「論集 説話と説話集」所収、和泉書院、二〇〇一年五月発行。

④ 『百鍊抄』寛治三年八月十六日、寛治四年七月十三日、「中右記」寛治四年三月二十六日条、『賀茂注進雅記』等参照。

⑤ 『後愚昧記』応安四年五月十三日条、石清水八幡宮焼亡先例に関する中原師香勘例、「保延六年二月二十一日、近日都人士女拳首參詣左女牛若宮、〔為義奉祝之〕、八幡宮御座件所之由有夢想云々」。

⑥ 「鴨社の神仏習合」、「鴨社の絵図」所収、財団法人糺の森顕彰会事務局編集・発行、一九八九年五月。

⑦ 『吉記』承安四年二月二十八日条。

⑧ 『轉法輪鈔』「神祇上 本」所収（『安居院唱導集 上巻』）

⑨ 『長秋詠藻』神社歌 「三品に叙して後、初めて諸社の奉幣使にまゐりたるに、賀茂の使にあたりてしもの御社より夜深けて上の御社にまゐりたるほどに、昔わかくて百度詣などしけるを、年久しくまゐらでかはらのありさまもはやく見しにかはりたる心ちするも、思ふ事多くて読けるむかしわが祈りし道はあらねどもこれもうれしなかもの河なみ

⑩ 『顯広王記』長寛三年（一一六五）一月二十三日、顯広王、神祇伯となる。「今晩參賀茂祈所望事、已有感応、可云利生。『山槐記』治承四年（一一八〇）二月二十八日「光長參籠賀茂上社云々」。二十九日、「光長〔去夜補五位藏人〕、出自賀茂」。

⑪ 『待賢門院璋子の生涯』第一章 院の姫君、朝日選書、一九八五年。

⑫ 『中右記』嘉保二年十二月十四日条、参照。

⑬ 『藤原範兼伝の考察』、『平安朝文学研究』所収、復刊6号、平成九年。

⑭ 「兵範記」保元元年八月二十九日、「今日当今若宮一人入内、一所神祇伯顯重朝臣家奉養、諸大夫六人、依勅定、參勤前驅、上白御車、被儲本

所歟、一所大舎人頭家行朝臣奉養、家行朝臣以下一家輩六人前駟云々。

①⑥ 『兵範記』久寿二年六月八日条参照。

①⑦ 大東急記念文庫蔵『古事談』（三冊本、43・6・三三九五）（マイクロフィルム）。「江戸初期と言っても中期に近い頃」の書写かとされる

（大東急記念文庫 貴重書解題）第三巻、一九八一年。

①⑧ 『和歌色葉集抄書』神宮文庫第三門一七七号、「応永元年八月二日、延光書写」の奥書あり。（神宮古典籍影印叢刊9『西公談抄・発心集・和歌色葉抄書』、皇学館大学、一九八四年）。

①⑨ 『本朝世紀』康治元年七月二十七日条には「中務少丞正六位上藤原朝臣実重」とある。一月十八日条には「散位藤原実重為近江国使」とあり、この藤原実重は、一月八日の叙位で従五位上になった儒者であると考えられる。同二年五月十四日条に「中務丞平実重」とあり、他の箇所でも平実重と藤原実重の混同した表記が見られる。

②⑩ 『台記』仁平元年十一月十五日春日参詣、同二年一月二十六日左大臣大饗の条。

②⑪ 『発心集の原態と増補』、『中世文学』22号、一九七七年。

②⑫ 荒木直人氏「鴨社河崎社考」（『鴨社の絵図』所収、財団法人礼の森顕彰会事務局編集・発行、一九八九年五月）に掲載の写真参照。

②⑬ 有季の母については『禰宜家譜』（鴨脚家文書・京都府立総合資料館蔵）参照。長継の妻については『平安遺文』六三二四号、「山城大徳寺真珠庵文書」参照。同文書の最後にある「仁平式年七月式拾伍日鴨御祖社禰宜従四位上鴨県主（花押）」に相当する人物は惟文である。

②⑭ 『山槐記』保元四年二月二十一日条「御椅子」（権大進行隆、刑部大輔為親、源中納言不参、仍為親重役）。

②⑮ 篁瀬一雄氏は長明の祖母（季継の妻で長継の母）と妹子内親王の間に、乳母のような特別な関係があったかと推測する。（『方丈記全注釈』、角

川書店、一九七六年）。

※引用に用いた主なテキストは、『古事談』は現代思潮社古典文庫、

『宮寺縁事抄』『耀天記』は神道大系「石清水」「日吉」、「春記」中右記『長秋記』『兵範記』『山槐記』は増補史料大成、『本朝世紀』『朝野群載』『百鍊抄』『後愚昧記』は国史大系、『長秋詠藻』は和歌文学大系、

『頭輔集』『千載集』は新編国歌大観、『頭広王記』は大日本史料長寛三年一月二十三日条所引、『吉記』は日本史料叢刊『明月記』は冷泉家

時雨亭叢書、『月詣集』は新典社研究叢書『月詣和歌集の校本とその基礎的研究』、『伊呂波字類抄』は正宗敦夫編、『古今著聞集』は岩波古典

文学大系の各本を用いた。